

## 編集後記

桜の花びらが一ひら一ひらと舞っていました。そしてついには、石畳を薄墨色に染めぬいて散りしきっていました。それは哀悼の散華。その季節がふたたび訪れてきました。

里井陸郎先生。あなたが逝かれて後の月日はむなしさとあわたししさのいりまじったものでした。ただくつきりとわたしたちのころに刻みこまれたのは先生の記憶でありました。あまりにも急であった先生の旅立ちを、誰しもがただ沈黙のうちに耐えしのぶばかりでありました。あれから一年、わたしたちは、ようやくここに先生を追悼するにはあまりにもつたない一文をもちよることをえました。先生の、未来を見通す輝いたあの瞳の光が、いま天上にあってさらに慈愛の色を帯びて生きとし生けるものにそそがれていると思いません。その眼差をもってわたしたちひとりひとりの学びの道を見守りつづけてください。

田中順二先生と山内潤三先生にいただいた玉稿に導かれながら、教えを受けたものどもの思いの一端をここに捧げます。(廣川勝美)

### 同志社国文学 第十七号

昭和五十六年三月二十日 印刷

昭和五十六年三月二十日 発行

編集 廣川勝美

発行 同志社大学国文学会

(代表) 南波 浩

京都市上京区今出川通烏丸東入

振替 京都二七三七

印刷所 共同印刷工業株式会社

京都市右京区西院久田町